

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Epidemiological survey of tick bites occurring in Hyogo Prefecture from 2014 through 2018

(兵庫県における 2014～2018 年のマダニ刺症に関する疫学的調査)

兵庫医科大学大学院 医学研究科

先端医学専攻 分子病態制御系

皮膚病態制御学 (指導教授 山西 清文)

氏 名 井上 裕香子

兵庫県内ではマダニ媒介性感染症として重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)、日本紅斑熱 (JSF) が発生している。これら感染症の発症リスクを考える上で、県内のマダニ刺症の実態を把握することが重要である。そこで今回、2014 年から 2018 年の 5 年間に、兵庫県内でマダニに刺されて医療機関を受診した症例のうち、県内各地の医療機関から情報を提供された 519 例について、患者の年齢、性別、刺咬を受けた月、原因となったマダニ種、マダニの刺咬部位、刺咬部の皮膚症状、マダニの除去方法、抗菌薬投与の有無、刺咬を受けた地域などについて検討した。患者の性別は男性 222 例、女性 297 例、年齢は 0～95 歳で、中でも 70 歳代が最多で 124 例であった。刺咬時期は 5～7 月が 353 例で全体の 68% を占め、これはマダニの主な活動時期に一致していた。原因マダニ種としては 8 種類が確認され、タカサゴキララマダニ (AT) が 431 例と最も多く、次いでフタトゲチマダニ (HL) が 72 例であった。AT による刺咬は主に若虫によるものであり、6 月に最多で、HL による刺咬は主に成虫によるもので 8 月に最多であった。刺咬部位は下半身が多く、68.4% を占めた。一方、頭頸部の刺咬例を原因種別に見ると、AT では 4.4% であるが、HL では 30% であり、種類によって刺咬部位が異なっていた。マダニの除去方法としては、医療機関を受診し局所麻酔下に摘出された例が 154 例と最も多く、次いで患者自身で除去した症例が 123 例だった。抗菌薬の使用に関しては、519 例中、178 例で抗菌薬を投与されており、そのうち 123 例がテトラサイクリン系であった。兵庫県を阪神、播磨、丹波、但馬、淡路の 5 つの地域に分け、それぞれのマダニ刺症の症例数と原因種について検討した結果、症例数は阪神地域が 154 例と最多であり、次いで淡路地域 133 例、播磨地域 132 例であった。いずれの地域でも AT による症例が最も多かった。AT 刺症 431 例中、ライム病に類似した直径 5 cm 以上の大きな紅斑を生じた症例は 61 例あり、tick-associated rash illness と考えられ、ライム病との鑑別が重要であると考えられた。今回の検討症例中に SFTS や JSF などの感染症の発症はなく、総合的にはマダニ刺症に伴う感染は偶発性であることが実証された。